OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	図書館スタッフによる学習支援の実践 ： 「プレゼン入門　話す基本技術」
Author(s)	久保山, 健
Citation	大阪大学高等教育研究. 2013, 1, p. 77-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究 （2012）1，77−83

【教育実践レポート】

図書館スタッフによる学習支援の実践:「プレゼン入門　話す基本技術」

久保山　健

1. はじめに

日本国内の大学では学士課程教育を充実する観点から多くの取り組みが行われている．大学図書館においても，従来の情報リテラシー教育に加え，ライティング支援，ティーチング・アシスタント（TA）による学習相談，ラーニング・コモンズ導入による自主学習を支える環境作りも珍しいものではなくなってきた．

筆者の勤務する大阪大学も例外ではない．本学の教育目標は「教養」，「デザイン力」および「国際性」である．それらを実現する基本的なアカデミック・スキルを身に付けるため，本学附属図書館，及び全学教育推進機構では，2010年度から授業外の学習支援企画として「レポートの書き方講座」，「論文の書き方，文献の読み方プチゼミ」（以下，論文プチゼミ）を実施してきた．

これらの講習会は教員と図書館スタッフが協働し，主に豊中地区の総合図書館ラーニング・コモンズを中心に実施している．さらに，それらを発展，補完するものとして，筆者が中心となり「プレゼン入門:話す基本技術」（以下，プレゼン入門）を2012年2月および9月に実施した．

本稿では，これまでの各講習会を概観し，「プレゼン入門」の目的や内容を述べるとともに，大学教育の中での意味を検討する．そして，最後に課題を述べる．

2. これまでの講習会の概観

「レポートの書き方講座」等の実施の背景には，2009年度にラーニング・コモンズが豊中地区の総合図書館，及び吹田地区の理工学図書館に開設されたこともあるだろう．ラーニング・コモンズは学生の主体的な学びを支援するものとして，「TeachingからLearningへ」というコンセプトで設けられた．そこでは，大学院生であるTAが学生の学習相談や質問に答えるサービスも開始された．また，ラーニング・コモンズは，図書館スタッフによる文献の探し方講習会や，教員による授業の会場としても活用されている．そして，教員と図書館スタッフが協働する形で2010年度から「レポートの書き方講座」，「論文プチゼミ」が行われている[(1) (2) (3) (4)]．

以下，簡単に振り返る．なお，筆者が関わっているのは2011年4月からである．

(1)「レポートの書き方講座」

「レポートの書き方講座」は当初，2010年6月に実施した．対象は1年生を想定し，全3コマを1グループ開催した．目標はレポートの書き方の基礎を身に付けてもらうことである．内容は大学教育実践センター（全学教育推進機構の前身）の堀一成准教授が構成し，総合図書館ラーニング・コモンズを会場に図書館スタッフが補助する形で行った．参加のべ人数は47名であった．

2011年度はほぼ同様のスタイルで実施したが，3年目の2012年度は同じ内容を複数グループ行い，より多くの学生が受講できるよう試みた．内容を構成するのは堀准教授だが，図書館スタッフとTAも講師を担当した．つまり，講習内容をパッケージ化し，複数の者が講師を担当することで，効率的に回数を増やすことを狙った．前期に3グループ，後期に1グループ，同一内容で行った．結果として，参加のべ人数は117名とすることができた．

(2)「論文プチゼミ」

「論文プチゼミ」は当初，2010年12月から翌年1月にかけて実施した．対象は3-4年生を想定し，全4コマを1グループ開催した．目標はパラグラフ・ライティング

所　属: 大阪大学附属図書館 利用支援課
連絡先: kuboyama@library.osaka-u.ac.jp

を身に付け，論文企画書を発表することである．内容は，ライティングとリーディングを組み合わせた講義・実習，及び論文企画書の作成と発表をまじえたものである．内容は，ライティングに関するコマを堀一成准教授，リーディングに関するコマを附属図書館の赤井規晃専門職員が構成，実施した．参加のべ人数は18名であった．最後まで参加した学生からは非常に有益だったとのコメントが寄せられた．

2011年度は，時期や内容は概ね同じであったが，回数を増やす工夫を行った．所定の曜日・時限以外に，欠席者や都合の合わない学生をフォローするために9コマの補講を実施した．補講の日時は受講者の都合に合わせ柔軟に対応した．補講の講師は，筆者と附属図書館の小村愛美職員が担当した．参加のべ人数は45名とすることができた．

3.「プレゼン入門:話す基本技術」

前項で概観したように，附属図書館，及び全学教育推進機構では学習支援企画としてライティング，及びリーディングの講習会を実施している．そして，2012年2月から筆者が中心となって，人前でロジカルに話すための「プレゼン入門」を実施することとした．附属図書館と全学教育推進機構の共催という形で実施している．本項では，その目的や内容等を紹介する．

(1) 実施目的，背景

「プレゼン入門」を実施した大きな理由は，本学の学習支援企画の充実である．話すことはライティング同様，情報のアウトプットである．「プレゼン」という言葉が一般的になっているにもかかわらず，それを学習する機会は少ないだろうという推測もあった．本講習を通じて，本学の学生が人前で分かりやすく話すことに貢献できればと考えた．

また，赤井専門職員が述べたように，大学図書館の教育機能のアピールという意味も含まれる[(3)]．そして，図書館スタッフが学習支援企画を自らも行うことで，大学図書館の教育機能を考え，本学の教育活動になんらかの関わりを持つ機会が増えることも期待した．

本学の教育目標の観点からも，実施の意味を考えた．本学の教育目標の一つに，グローバル社会で活躍できる「国際性」を備えた人材育成があげられている．「国際性」の英訳には，“Transcultural Communicability” が当てられている．単なる語学力ではなく，広く異文化コミュニケーションを意識したものであろう．その具体例として，自分の考えを自分の言葉で，ロジカルに話す能力も含まれると考えた．これも，ロジカルに話をする基礎を身に付けることを取り上げる背景となった．

そして，実施を検討するに当たって，学内での必要度をある程度調査した．前述の堀准教授をはじめ，普段お世話になっている教員を中心に必要度を個別に質問させていただいた．回答は実施に前向きなものであり，授業中には教える時間も取りづらいとの声もあった．シラバスによれば，いくつかの授業でいわゆるプレゼンを盛り込んでいるものもあったが，一定のニーズはあると判断した．（その後の学生との会話の中で，ある英語の授業ではロジカルに話すことを学習しているということも分かった．また，プレゼンをメインにした授業がこの翌年度に一コマ開講された．）

なお，講習の名称に「プレゼン」を含めると，ビジュアルに訴えた発表に関するものと受け止められ，逆に内容の誤解も懸念された．しかし，学生の気に留まるだろうとの理由で「プレゼン」を最初に置き，サブタイトルとして内容を表す名称を加えることとした．そして,「プレゼン入門:話す基本技術」とした．

このような目的，背景で「プレゼン入門」をスタートさせた．

(2) 実施時期，参加人数，場所

最初は，2012年2月半ば，授業休業期の初日から3月はじめにかけて実施した．回数は全2コマとした．全2コマとしたのは，1コマでは物足りず，3コマでは受講者が負担に感じるかもしれないという理由からである．

当初は定員8名を2グループの予定だったが，申込が多かったため，4グループ実施した．参加者数は実人数で31名，のべ58名であった．1年生から修士2年生と幅広く，論理的な話し方を習得したいと考える学生が広く存在していることが感じられた．

2回目は，2012年9月中旬の授業休業中に実施した．全2コマを2グループ開催し，希望者対象に発展編を1コマ行う形とした．参加者数は実人数で15名，のべ33名であった．このときも1年生から博士2年生と幅広い学年から参加があった．

授業休業期に開催すると参加者が少なくなる懸念もあったが，必ずしもそうではなかった．あくまで休業期の受講者対象ではあるが，1回目に行ったアンケートでは，「休業期の方が参加しやすい」との回答が半数以上，「どちらとも言えない」が約4分の1であった．別の場面

で休業期は帰省するので参加しづらいとの声も聞いたが，休業期でも一定数の学生は参加できる状況にあることが推測できた．

2回目の時期は，授業開始の10月に近い9月下旬の方が参加しやすいと考えたが，職場のシステム入替や10月からの新サービス公開の準備のため，やむを得ず少し早めることになった．

場所については，総合図書館ラーニング・コモンズで行った．但し，2012年9月の発展編は，広い会場でのアイコンタクトの練習を取り入れるため，総合図書館の図書館ホールで行った．

(3) 内容

到達目標は，(a) 話す時のトピックセンテンス，パラグラフについて知る，(b) 話す時に必要な要点のヒントを身に付けるとした．

全体の構成を述べる．1コマ目は，トピックセンテンスやパラグラフ，スピーチの基本構成の解説を行い，1分間スピーチで実践する内容とした．2コマ目は，導入と結びの技術，つなぎの言葉，そして声やアイコンタクトを中心としたデリバリーの技術を解説し，再び1分間スピーチで実践してもらった．2012年9月で付け加えた発展編では，ブレインストーミングの練習，広い会場でのスピーチ練習，そのビデオ撮影，そして，話す実践の一つである司会を行う際の留意点の解説を行った．

1グループ目のアンケートで実習の時間が長い方がよいとの声があり，全体を通じて解説はなるべく短く，実習を長くするよう心がけた．実際，スピーチ実習の満足感が高い様子もうかがえた．トピックセンテンスやパラグラフなどの概念については，高校までの英語授業等で知っている受講者が多くいた場合は，理解度を確認し，適宜短縮した．

1分間スピーチを行う場面では，徐々に難易度を上げるようにした．最初から全員の前で行うのではなく，まずはペアで練習してもらい，お互いがフィードバックしあう形を取った．

最初にペアで練習を行ったことにはそれ以外の目的もあった．一つはそれぞれに聞くという役割を与え，話す側にフィードバックしてもらうことにより，話す場面での留意点を理解してもらうことである．そして，受講生同士の意見交換により，話すことと聞くことの楽しさを感じてもらい，場の雰囲気がより活発になることも期待した．様子を見ていると，「話す」という慣れないことをしている同士のためか，意見交換は楽しそうな様子であった．時には一旦終了と声をかけるのが申し訳ないと感じるほど活発なこともあった．さらに，フィードバック自体も「話す」練習となる．解説を加えられそうであれば，その際もロジカルに話すことを意識してもらい，時間管理も行うように配慮した．

全員に向かってスピーチする場面でも，1コマ目と2コマ目では難易度が上がる形を取った．1コマ目は，ミーティング用テーブルを囲む状態から自席で立ち上がる形で行ってもらった．つまり，その場で立ち上がるだけでよく，机によって脚が隠れるため，全身が見えないという比較的安心な状況である．しかし，2コマ目の時は，より人前に出ている感じを出すため，そのテーブルから2メートルほど離れた場所で全身が見える状態で行ってもらった．より正確に言えば，そのようにする意志があるか，やる気を引き出すように聞いた上で行った．但し，共用スペースで行っているため，ホワイトボードを仕切り代わりに使用して，発表者がより集中しやすいよう配慮した．

2コマ目の1分間スピーチの際は，よい点をコメントする人，改善点をコメントする人，コメントシートに記入する人と役割を順に担当してもらった．よい点と改善点をコメントする際には，そこでも時間管理をして，話す場面での30秒や1分の長さを体験してもらうよう心がけた．

2コマ目では，人前で話す一つの例である司会の体験もするため，司会の役割も設けた．しかし，司会についての解説の時間を取れなかったので，あまりよい練習にならなかった．時間の問題もあるが，1分間スピーチ以外に司会という課題を加えると，受講生が理解できる量を超えていたかもしれない．但し，時間管理の役割を司会役の受講生に移すことで，講師としては1分間スピーチのコメントに集中できたのは事実である．

そして，全体を通して，適当なタイミングで実習を交える構成とし，受講者の集中が続くようにも心がけた．1コマ目では受講理由を含めた自己紹介，2コマ目では声を意識しながら自己紹介する練習などを交えた．なお，1コマ目の受講理由を含めた自己紹介では，時間管理を行い，時間の長さと中味のバランスを知ってもらうようにした．2コマ目の声を意識しながらの自己紹介では，声の大きさや速さ，そして「間」をコントロールしながら，頻出単語である自分の名前を発声してもらう課題を設定した．

写真１　声を出しやすくする体操の様子

写真２　解説の様子

写真３　２回目の１分間スピーチの様子

(4) 内容の元になったもの

「プレゼン入門」の中味は，筆者がかつて英語スピーチで学習したことが主なベースとなっている．それは，アジア図書館[5]（大阪市東淀川区）で開催された松中みどり氏の英語クラスである．パラグラフの解説や，一つのパラグラフを英語で話す練習などから始まり，最後には，テーマや方法も自由，ロジックやアイコンタクト，声にも配慮した上で，英語での15分スピーチを行うものであった．また，2011年7月の大学図書館問題研究会京都支部ワンディセミナーでの松中みどり氏の講演内容も加えた[6]．さらに，「論文プチゼミ」で堀准教授が作成したパラグラフの説明用資料を転用させていただき，全体を構成した．なお，一部参考にした資料は文末に掲載する[7][8]．

ロジカルに話すことを解説した日本語の書籍はあまり見つけられなかった．もし適切な参考資料があれば，ぜひご教示いただきたい．

(5) 受講生の反応

受講生の多くは，苦手意識を持ちながらも，人前で話すことを自らの課題とする向上意欲のある学生が多いようだった．受講生それぞれは，授業やゼミ，サークルでのミーティング，学会発表の場などで自分の課題として感じたようである．本講習での1分間スピーチの場面でさえ「緊張した」という声も聞かれた．

アンケートでの有用度の5段階評価では高い評価を得た（非常に有益（5）~普通（3）~役に立たない（1））．1回目は平均4.50，2回目は平均4.56であった．

高評価の背景には，話す技術について学習した機会の少なさがあると考えられる．実習をなるべく長く取ったことや，学生同士のやり取りを交えたこともよかったと考えている．また，発展編で行ったブレインストーミングの練習やビデオ撮影も好評だった．

アンケートに対しては，1回目では記載された疑問点等をタイプし直して，全員にコメントをフィードバックしたが，これは講師側の負担が大きかった．2回目では口頭でフィードバックするようにした．

4. 大学教育の中の「プレゼン入門」

「プレゼン入門」は本学の教育の中で，どのような意味を持ったであろうか．

前述の「実施目的，理由」で，「大学図書館の教育機能のアピール」，図書館スタッフが「大学図書館の教育機能を考え，本学の教育活動になんらかの関わりを持つ機会」と述べた．これについて，一定の効果はあったと考えている．例えば，「プレゼン入門」に実人数で3名の教員がサポートや聴講に来ていただいたことや，ある教員がFacebookで「プレゼン入門」を紹介していただいたことは，大学図書館で実施している講習会としては興味深いエピソードではないだろうか．

また，サポートにお越しいただいた教員が「プレゼン入門」で行ったビデオ撮影を参考に，ご自身の授業にも取り入れられたそうである．これは，図書館スタッフと教員の間に双方向の作用が働いたということであり，筆者としてはプラスの変化だと受け止めている．

このように，従来の大学図書館による情報リテラシー教育とは異なる形で，本学の教育との関わりのきっかけを作ることができたと考える．また，それは「レポートの書き方講座」,「論文プチゼミ」の積み重ねによってできていることも忘れてはならない．

但し，今回の活動はまだきっかけを作った段階であり，これからも大学図書館と教育活動の関わりについては，議論や実践を続けていきたい．

5. 課題

「プレゼン入門」の課題を整理しておく．

(1) 内容と回数の充実

本講習へのニーズは当面続くと予想するが，内容は常に見直したい．発展編については，より洗練させたい．また，グループ数を増やすことで多くの受講機会を提供したい．

(2) 位置付け

受講機会の増加を目指す一方，他の業務や講習会もあるため，いずれ限界は見えるだろうとも考えている．一定程度で続けるのか，大学図書館の新しい機能として拡充を図るのか考える必要が出てくるだろう．

但し，見逃してはならないのは，こういった講習会を行うことで，本学の教育活動と図書館スタッフの活動との距離が近くなり，意識や課題の共有につながることである．授業の一コマでのいわゆる情報リテラシー教育とは異なる関係や，教員やTAのみが指導を行うこととは異なる状況が生まれるのではないだろうか．図書館スタッフが本学の教育活動に関わることで，大学図書館の持つ学習空間やIT機器，そして書籍等をより効果的に教育活動に活かすことにつながることも期待される．

さらに将来，これらの講習会の内容が教員やTAの活動に組み込まれることとなった場合，図書館スタッフの新たな位置付け，あるいは新しい教職協働の形を考える必要があるだろう．

(3) 効果分析

アンケートで有用度を質問しているが，実際にどの程度身に付いたか，あるいは，実践の場面で役に立ったかどうかは評価できていない．実施数ヶ月後の事後アンケートも考えたが，他の仕事の都合や，受講生への負担を懸念し，実施できていない．今後は講習会の間に協力依頼をするなどして，事後アンケートも検討したい．

(4) 継続性の確保

現在は筆者のみが講師を担当しており，複数で実施する体制は取れていない．日本語のスピーキングはライティングよりも定型化されていないという状況もあり，属人性が高いのかもしれない．スタッフの底上げを図るか，別の内容で実施できる人材を揃えるかが課題となるだろう．

(5) 授業との関わり

「プレゼン入門」は全学教育推進機構との共催で行い，一部の先生方と関係を持ちながら実施している．その点は評価したいが，授業との関わりは大きいとは言えない．まずは，顔見知りの先生方に担当授業での紹介をお願いしている程度である．そのお願いが内容紹介を兼ねているだろうが，今後は，先生方の「話す」ことに対する問題意識を伺い，学生への受講推薦をしていただくことも進めたい．授業内での一部実施を提案する可能性も念頭には置いておきたい．

6. まとめ

本稿では,「プレゼン入門」の目的や内容，大学教育の中での意味，そして課題などを述べてきた．2012年2月~9月の間に，2回に渡って計6グループ実施し，実人数で46名の受講生を対象にした．ある程度のニーズがあると推測されるが，大学教育を巡る状況も一定ではない．本稿を通じて，関係の先生方に「プレゼン入門」などの存在を知っていただき，教育活動の中での必要度や貢献のしかたについて，ご助言をいただければ幸いである．

また,「プレゼン入門」は，学習支援や教育支援という意味で，これまでの「レポートの書き方講座」,「論文プチゼミ」の積み重ねの上に位置付けられるものである．これからも，それらの実践を通じて，大学図書館と教育活動の関わりについて，関係の方々と議論と実践を深め，かつ広げていきたい．

謝辞：実施内容の助言，説明資料のご提供，そして講習自体のサポートをしていただいた全学教育推進機構の堀准教授，講習自体のサポートや助言をしていただいた全学教育推進機構の坂尻彰宏准教授に謝意を表します．実施前に語学教員の立場で学生の状況を助言いただき，聴講およびサポートいただいたサイバーメディアセンターの竹蓋順子准教授にも併せて謝意を表します．また，企画や実施の際，助言や協力いただいた同僚各位に謝意を表します．

そしてなにより，かつての英語クラス等の内容の活用を快諾いただいた松中みどり氏への感謝は言い尽くせない．心から謝意を表します．

2013.1.4受付／2013.2.12受理

注釈

(1) 堀一成. 附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み. 大阪大学大学教育実践センター紀要, 7. 2011.3

(2) 上原 恵美, 赤井 規晃, 堀 一成. ラーニング・コモンズ：そこで何をするのか,何がやれるのか. 図書館界, 63（3）. 2011.9

(3) 赤井規晃. 大学図書館とライティング教育支援. カレントアウェアネス, 310. 2011.12

(4) 堀一成. 附属図書館ラーニング・コモンズを利用した大阪大学における学修支援の取り組み. 図書館雑誌, 106（11）. 2012.11

(5) アジア図書館. http://www.asian-library-osaka.org/ [accessed 2012.12.30]

(6) 大図研京都ワンディセミナー「伝える技術を磨こう:比較文化の視点で発信力アップ!」のご案内. http://www.daitoken.com/kyoto/event/20110730.htm [accessed 2012.12.30]
なお，松中氏は企画者側のセミナータイトルを「伝わる技術ってどういうこと?」と置き換えた．人に何かを伝えるのは一方的なことではなく，双方向なことだという主旨と理解している．

(7) 津田久資, 下川美奈. ロジカル面接術. 2013年基本編. ワック. 2011 から第2章 (p.87-96)

(8) 平井通宏. エンジニアのための英語プレゼンテーション超克服テキスト. オーム社, 2007 から第5章 (p.74-81)

An Attempt to Support Learning by a University Librarian "Introduction of Presentation: Basic Skill for Logical Speaking"

Takeshi KUBOYAMA

This paper describes a basic lecture for presentation as extracurricular education in Osaka University Library.

A lot of university libraries in Japan have been working on information literacy education for years. In addition to this, university libraries have recently started working on other learning support activities, too. For instance, learning consultation by Teaching Assistants, writing support and, launching Learning Commons. Osaka University Library and Center for Education in Liberal Arts and Sciences have been cooperating closely to implement writing support activities as extracurricular education since 2010. These are unique attempts, since teachers and librarians work on collaboratively and librarians also have role of a lecturer for some classes.

This paper, firstly reviews these writing support activities, and then describes detail of "Introduction of Presentation: Basic Skill for Logical Speaking".

The lecture has been delivered by the author of this paper.

Keywords :
Library, Learning Support, Education Support, Writing, Presentation, Introduction of Presentation, Basic Skill for Logical Speaking

Affiliation: Librarian, Specialist User Support Division, Main Library, Osaka University, JAPAN